

ウスバリュウゼツでは、開花後の花茎上に多数の子株の生育が観察されたが、本株では花茎上の子株は観察されなかった。

12月中旬に枯れこんだ部分を除去した。地上茎（ロゼット部分）と花茎の長さを測定したところ、地上茎は1 m 30cm（写真5）、花茎は8 m 30cmあった（写真6）。花茎上部3 mの部分からは22房の

花房が出ており、1房に平均50個の花が見られた。この時、根茎部から3個の吸芽が観察された。最大のもので葉が1 m展開していた。

参考文献

横山裕彦 1995. リュウゼツラン属 (*Agave*) の開花について。広島市植物公園栽培記録 16:1-2



巨大カボチャの栽培について

名和田 潔

第一回サマーフェア・平成19年7月14日（土）～9月16日（日）の期間中、‘巨大’をテーマに飼料用カボチャ（品種名：アトランチック・ジャイアント）の栽培に取り組んだ。

準備作業

栽培場所は大温室前のワシントンヤシモドキの樹間とした。土づくりのため、2月上旬50 cm程度の深さまで耕し、15 m²当たり牛ふん32 kg、鶏ふん30 kg、油かす20 kg、バーク堆肥100 kg、腐葉土20 kgをすき込んだ。

4月上旬、15 m²当たり苦土石灰を3 kg、植え付けの数日前に基肥として有機入り粒状複合ペレックス(8-8-8-1)を3 kg施用した。（同時に安佐動物公園の動物のふんと敷きわらを堆肥化したものをすき込み、ここで育てた巨大カボチャをアフリカゾウに食べさせるという企画も計画した。）

育苗はガラス温室内の温床で、2/18播種、4/15本葉5～6枚の苗を2株植えつけ、4月下旬まで寒さよけのためにビニールで被覆した。（3/18播種、5/3植えつけも2株あり）

栽培管理・生育状況

活着後、親づるを摘心して子づるが4～5本伸びだした頃、生育のよい子づるを2本にしてそれぞれ20節以降に交配・着果させ、その後1果に制限した。追肥として5/27に液肥を、6/26、7/11にペレックスを1株当たり250 g施用した。

薬剤散布は、5/13、5/23、6/5、6/30、7/5の5回行った。6/14入梅後、雨が少なく蒸し暑い日が続いたため、株元の老化葉にうどんこ病が発生し、その部分のみ切除した。7月以降、葉裏にオンシツコナジラミの

発生が目立つこともあった。炎天下、果実が高温になり腐敗することもあると考えられたので、日よけのために一番大きな果実にパラソルを設置した。

着果後は急激に肥大を始め、盛期には直径が1日当たり2 cmずつ増加し、7/16には直径58 cmになった。果実が大きくなるにつれてつるを持ち上げて裂ける恐れがあるため、早めに果実の元のつるを持ち上げて余裕をもたせておいた。

また、7月以降は人工交配しなくても着果し始めた。1番果の肥大が停止したと思われたので、さらに1果着果させ、それも直径40 cm以上に肥大した。果皮は生育中クリーム色だが、成熟すると朱色のきれいな色になった。

入園者への対応

サマーフェア期間中、常時3～4個のカボチャを植栽展示することができた。2週間おきにカボチャの直径を計測し、その数値を計測日とともにパネル表示して入園者に知らせた。更に直接果実を触れられるように通路近くにも着果させた。つるつるした表面をなでたり、カボチャといっしょに記念撮影する入園者も多く、巨大カボチャを十分アピールすることができた。

安佐動物公園ではナイトサファリ・オープニング企画として、8/11（土）、8/12（日）の両日、本園提供の巨大カボチャ（直径47 cm、重さ30 kg）をアフリカゾウに食べさせた。牙を使ってカボチャを持ち上げ、落として割れたカボチャを食べ始め、試食は好評だった。

課題

‘巨大’がテーマなので、とにかく大きく作ることが一番である。遺伝的に素質のよい種子を使わなければ超巨大果は望めないが、市販品種でもそれなりにアピールできる大きさになるので、まず株づくりであり、そのためには土づくりが重要である。さら

に生育中には伸長するつるの各節から発根するのでそれも丁寧に扱い、株全体の勢いを維持することが大切である。通常、カボチャはあまり肥料をやらないが、株を育てるためには定期的に追肥が必要である。

今回 20 節前後で交配・着果させたが、まだその



写真 1. 大きさを表示したカボチャ

時点では茎葉が十分育っていなかったため、もう少し着果節位を上げた方がよいようである。

サマーフェアの期間が巨大カボチャにとってはやや早い設定なので、今後はミニカボチャなど特徴ある品種も積極的に活用して、更に入園者に楽しんでもらうつもりである。



写真 2. 試食中のアフリカゾウ

新たに導入した植物（ヒビスクス属）の栽培と展示

濱谷修一

ヒビスクス属 (*Hibiscus*) は世界各地の熱帯、亜熱帯を中心に、一部温帯に約 250 種が分布する。一部の種は園芸的に普及し、盛んに品種改良が行われているが、その他の多くの種は図鑑等には紹介されているものの広く栽培されるには至っていないようである。そこで、種子交換等によりヒビスクス属の植物を導入・栽培し、特に観賞面についての魅力について改めて観察を行った。

ヒビスクス・アケトセラ (*H. acetosella*)

(写真 1、2)

アフリカのアンゴラ地方原産。植物体全体が赤く、観葉植物としての利用の可能性がある。また、花色は濃いワインレッドで、好き嫌いがあるとは思いますが非常に印象的。花の直径は約 12cm。開花期は 11 月～4 月頃となり、花を楽しむためには冬季温室内で栽培する必要がある。草丈は 2 m を越える一方で、茎はそれを支える強度がないため、支えをしてやる必要がある。

平成 19 年度は、夏咲きのつる植物と組み合わせ

て熱帯スイレン温室の壁面に茂らせ、冬の間の彩りとして利用した。盛んに分枝し、赤い葉が壁面を覆ってくれた一方で、距離が離れると花が目立たなくなるように感じられた。また、午後 2 時過ぎには花がしばみ始めるのも残念だった。

ヒビスクス・ラバテロイデス (*H. lavateroides*)

(写真 3)

メキシコ、グアテマラ、ベリーズの国境付近原産。11 月下旬に草丈 50 cm 程度で開花。やや筒状で幅 3.5cm、長さ 4 cm 程度の花を咲かせた。開花した花は桃色だった。ほど良い大きさでかわいらしい印象を受けた。開花中は大温室内に展示した。その後草丈は 1 m 程度まで伸びた。

全体に細く、節間が開いて間延びした印象を受けたので、強光下で栽培するなどしてもう少しがっちり育てることができれば、鉢花として有望である。冬咲きなので花を楽しむためには冬季加温が必要だが、アケトセラほど大きくならないため、家庭でも十分楽しめると思われる。春ごろには茎の先端から枯れこんでくるため（株全体は枯れないが）、種子からの繁殖が有効と思われる。